

私の工夫

規範意識の芽生えを培うために
身近な人とのかかわりを
深める中で

玉野市立荘内南幼稚園

主任 藤本 実穂

(実践した園は26年度在籍の玉野市立和田幼稚園)



1 はじめに

現代社会は、情報技術の進歩や核家族化などにより、いろいろな人とかかわる機会が減少し、家庭と地域のつながりが希薄になってきている。そのため、社会生活における望ましい習慣や態度を、子どもだけでなく、大人も、周りの人から自然に学ぶ力が弱く、自分の価値判断だけで行動する傾向があり、規範意識の低下を感じる。

研究実践園である和田幼稚園、日比幼稚園の幼児は、情緒が安定し、明るく素直であり、身近な人とかかわることを楽しもうとするが、かわり方については友達のように耳を傾けにくかったり、自分で判断できず、人の意見に流されたりする姿が見られる。保護者は教育熱心であるが、社会全体の生活様式や考え方の多様化によって、規範に対する共通した意識をもちにくく、していいこ

とやいけないことを子どもに教えているという意識と、実際の行動には差が見られる。

このような社会環境や実態から、幼児自らいろいろな人とかかわり、様々な感情体験を積み重ねる中で、身近な人とかかわることが楽しくて心地よいと実感できるように教師が働き掛けながら、規範意識の芽生えを培っていくことが大切であると考えた。そのためには、幼児自身が誰かの役に立ち、必要な存在であることを実感していくことや、相手の思いを感じ、人と心地よい関係を築くための力を体得していくことが必要なのではないかと考え、実践に取り組んだ。

2 研究の内容

◎めざす幼児像

相手のことも考えて行動しようとする子ども

このようなめざす幼児像に迫るために「自己有用感を育むこと」「自分の気持ちを調整する力を育むこと」の2点に着目した。それらを育むためには、「大切にされる体験」「役に立って認められる体験」「思いを伝え合う体験」「折り合いをつける体験」の四つの体験を積み重ねることが大切であると思われる。これらの力が育まれると、幼児自ら規範を守る必要性に気づき、守ろうとし、相手のことも考えて行動するようになるのではないかと考えた。そして教師は、そのために必要な援助を、幼児の実態に沿ってしていくことが大切であると捉えた。

○「自己有用感が育まれる」とは

人に対して温かい気持ちをもつようになった幼児が、人が困ることはやめようと思うようになり、やがては人のために行動しようとする、その原動力が育まれること。

○「気持ちを調整する力を育む」とは

人と気持ちよく過ごすために相手のことも考えて自己発揮したり、自己抑制したりしながら行動しようとする力を育むこと。

このように捉え、規範意識の芽生えを培うために、自己有用感や気持ちを調整する力を育む四つの体験を積み重ねられるように、年齢別のねらいを設定し、具体的な教師の援助

を明確にした「規範意識の芽生えを培うための教師の援助表」(表1)を作成した。そして、幼児の実態に沿った援助を意識しながら、実践を積み重ねた。

◎実践にあたって工夫したこと

①大切にされる体験の中で、幼児が人に対する信頼感や感謝の気持ちをもちることができるように、身近な人とかかわりを工夫する。



地域の方とのふれあい遊びで大切にされる体験をしている様子

②役に立って認められる体験の中で、幼児が役割を果たしたり、人のために行動したりするように、人の役に立つ機会をつくり、認める。

③思いを伝え合う体験の中で、幼児は互いに思いを表現し合い、相手の思いをきこうとするようになるよう

に、一人一人の思いを十分受け止め、橋渡しをする。

④折り合いを付ける体験の中で、幼児が心を揺れ動かしながら、相手の思いに気付き、受け入れたりよりよい方法を見付け出したりすることができるように、葛藤している姿に寄り添いながら、互いに納得できるきっかけをつくる。



思いを伝え合い、折り合いを付ける体験をしている様子

3 成果

「大切にされる体験」「役に立って認められる体験」を通して、幼児は人への信頼感をもったり、満足感や達成感を味わったりしたこと、人とかわかる楽しさを感じながら、自己有用感を育んでいくようになった。

た。また、「思いを伝え合う体験」

「折り合いをつける体験」を通して、自己主張だけでなく、自己抑制もしながら、思いや考えを伝え合ったり、折り合いをつけようとしたりするなど、自ら気持ちを調整する姿も見られるようになった。四つのそれぞれの体験の中で培ったことは、一つ一つが切り離されたものではなく、相互に影響し合っているからこそ、自己有用感や気持ちを調整する力がより育まれ、相手のことも考えて行動しようとする姿へとつながったと思われる。そしてこの四つの体験は、規範意識の芽生えを培う上で大切であることが分かった。

4 おわりに

この研究から、幼児は身近な人とかかわりを深め、人の温もりを感じながら豊かな体験を積み重ねていくことで、規範意識の芽生えを培っていくことを実感した。そして、そのためには人とかかわる機会をつくることが重要であると改めて感じた。今後も、幼児の姿をしつかり捉え、一人一人に沿った必要な援助を探ったり、見直したりしながら、幼児の規範意識の芽生えが培われるように努めていきたい。

(表1)

規範意識の芽生えを培うための教師の援助 ～人とかかわりを深める中で～

	① 大切にされる体験	② 役に立って認められる体験	③ 思いを伝え合う体験	④ 折り合いをつける体験
ねらい	3歳児-人とかかわることを喜び、親しみをもち、 4歳児-信頼感や安心感をもって人とかかわる。 5歳児-信頼感や安心感をもって、自分から行動する。	3歳児-一人のために自分なりにできることをしようとする。 4歳児-一人のためにできることをやり遂げる。 5歳児-一人のために進んで行動する充実感を味わう。	3歳児-自分の思いを素直に表現しようとする。 4歳児-自分の思いをいろいろな方法で出し合う。 5歳児-自分の思いや考えを伝え合う。	3歳児-相手の思いを知る。 4歳児-相手の思いに気付き、受け入れようとする。 5歳児-相手の思いや考えを受け入れ、よりよい方法を見付ける。
自己有用感や気持ちを調整する力を育む援助	身近な人とかかわりを工夫する。 (1)身近な人と触れ合い、人のぬくもりを感じられる機会を計画的に設け、人と喜んでかわかる姿を見守ったり、教師がモデルとなったりする。 (2)自分がしてもらって味わった楽しさを実感できるように、共感したり言葉にして返したりする。 (3)相手に親しみをもちてかわかることができるように、相手がよさを認めてくれたり、大切に思ってくれたりしていることを実感できるように働き掛ける。 (4)自分たちのためにしてくれていることを感じ、感謝の気持ちをもったり、それを相手に伝えたりする機会をつくる。 (5)自分が親切にされたことを嬉しく思い、周りの人にもしてあげようとする姿を認め、自分も人を大切にしたいと思えるようにする。	人の役に立つ機会をつくり、認める。 (1)幼児の実態に合ったものや、少し頑張ればできる課題を投げ掛けることで、自信をもってできるようにする。 (2)自分が頼りにされていることを実感できるような言葉掛けをし、役割を果たす意欲をもてるようにする。 (3)役割を果たそうと自分から進んで行動している姿を認め、その気持ちが良いことを伝える。 (4)自分が必要とされていると幼児自身が実感できるような機会をつくる。 (5)自分の行動でみんなが助かったり、嬉しい気持ちになったりしていることを伝え、いろいろな人から認められる機会をつくり、役に立っている喜びを感じられるようにする。 (6)一人一人が自分の役割を果たしながら、みんなで力を合わせて成し遂げられる機会をつくり、認めることで、満足感や達成感を味わえるようにする。	一人一人の思いを十分受け止め、橋渡しをする。 (1)自分の思いを安心して表現できるように温かい雰囲気をつくり、一人一人の思いを十分受け止める。 (2)思いを伝えにくい幼児には、言い方を知らせたり、一緒に言ったりするなど橋渡しをする。 (3)思いを自分なりの表現で相手に伝えようとする姿を認めたり、具体的な言葉を知らせたりすることで、思いを伝えることができる心地よさに共感する。 (4)トラブルを止めたり、すぐに解決に向けたりするのではなく、互いの思いが伝わるように、代弁したり言葉を補ったりする。 (5)相手の思いをきこうとしている姿を認める。 (6)解決しようとするみんなで意見を出し合っていることを認め、自信につなげていく。	葛藤している姿に寄り添いながら、互いに納得できるきっかけをつくる。 (1)相手の様子に目を向けさせることで、相手が自分とは異なる思いをもっていることに気付かせる。 (2)思い通りにならないことを受け入れられるよう、周りの意見をきく場を設けることで、様々な考えがあることに気付き、自分自身の行動を振り返られるようにする。 (3)自ら納得して行動できるように、葛藤している姿をたらえて必要な時間をとる。 (4)折り合いをつけようとしている心の動きを認めることで、自信をもったり相手を思いやる気持ちをもったりできるようにする。 (5)自分たちで解決の糸口を見付けられるように、考えを引き出したり、提案をしたりする。 (6)幼児の気持ちの変化を言葉にして返すことで、折り合いをつけられたことを実感できるようにする。 (7)互いが納得して行動できたことを認め、理解し合える心地よさに共感する。